

資料

多職種連携に貢献できる研修会実施に関する報告 平成 29 年度 北海道文教大学 理学・作業・看護合同企画研修会 「チームで実践!! 一般病棟における認知症ケア」

高岡 哲子・小堀 ゆかり・横井 裕一郎*・奥村 宣久**・木村 眞子
木口 幸子・永井 紅音・吉田 直美・山口 智恵子

(2018年1月9日受稿)

I. はじめに

日本看護協会¹⁾は、看護職が継続学習による能力維持・開発に努めることは、看護職自らの責任ならびに責務であるとし、様々な研修を企画して学習機会を提供している。また、厚生労働省²⁾も、病院などの規模にかかわらず医療機関においても、新人看護職員が基本的な臨床実践能力を獲得するための研修を実施する体制づくりをするなど、専門職業人である看護職の質向上に向けた取り組みをおこなっていることがわかる。

文部科学省³⁾は、キャリアガイダンスを大学設置基準に位置づける背景を説明する中で、キャリアガイダンスは、単に卒業時点の就職を目指すものではなく、生涯を通じた持続的な就業力の育成を目指し、豊かな人間形成と人生設計に資するものであるとしている。つまり、看護職に対する生涯学習に大学も責任を持つことが明確にされ、各大学は卒業生に対して様々な研修による学習機会を提供している。これを受けて本学科においても、卒業生を対象とした生涯学習に貢献できる研修を実施しようと考えたが、どのような企画が卒業生のニーズに合致しているのかが不明確であった。高岡ら^{4) 5) 6)}は、卒業生の実態を把握するために平成24年度～26年度の間、看護学科卒業生を協力者として横断的に「看護学科卒業生の成長に影響を及ぼす特性」に関する研究を行った。この結果、新人看護師は経験の積み重ねと経験の意味づ

けを行いながら成長していた一方で、仕事に追われ、気持ちの切り替えができないなどの余裕のない現状から学習環境を整える能力が未成熟であることがわかった。そこで我々は、本企画を計画することにより仕事に追われる中での学習機会になること、また後輩に対して経験を語ることににより意味づけを強化することにつながると考えた。

文部科学省³⁾は、「職業指導（キャリアガイダンス）」を適切に大学の教育活動に位置づけることが必要であるとしている。本学の看護学科においては、看護総合Ⅰ～Ⅳの科目および就職課と連携し、就職活動に関する研修を行っている。しかし、これらは教員や外部講師による講義が主で、卒業生と交流する機会はわずかである。在校生が先輩と交流することは、自身の近い将来をイメージすることにつながるため、現在の学習の意図が明確になり、モチベーション向上につながると共に、就職活動の一助となると考えた。本企画を臨床における患者に接する上での実践能力を高める内容にするには、本学の特徴を活かして理学・作業・看護学科連携の企画とし、これにより、チーム医療の視点を再確認する機会になるものと考えた。以上のことから本企画の開催目的は、本学人間科学部の一般病棟に勤務し、直接患者と接する機会が多い職種である、理学療法士・作業療法士・看護師および保健師の卒業生や在校生に対して、学習と他学科、先輩後輩との交流の機会を提供す

北海道文教大学人間科学部看護学科 *北海道文教大学人間科学部理学療法学科

**北海道文教大学人間科学部作業療法学科

ることである。

Ⅱ. 本企画の計画

1. 本企画のテーマ設定理由

我が国における平成28年の高齢化率は27.3%で、平成6年の14%⁷⁾と比較して高値を示している。これに伴い、65歳以上の認知症有病率は、平成24年には15.0%、平成27年に15.5%⁷⁾と増加傾向にあった。認知症は、中核症状のほかに行動・心理症状(BPSD)が出現し、日常生活に支障をきたす危険性があるため病気に対する治療が予定通り行なえないことや、必要な治療を断念せざるを得ないことも推測できる。これに対して、平成28年度診療報酬改定において一般病院における認知症ケアが診療報酬により評価された⁸⁾。日本看護協会や日本老年看護学会では認知症ケア加算に関する各種研修が行われるなど、現在、最も旬な話題であると考え、この認知症ケア加算は1と2に分類される⁸⁾が、どちらも「認知症ケアチーム」をつくり、チームでアセスメントし、適切に対応することを重視しているため、患者と直接かわる機会が多い、理学療法学科、作業療法学科、看護学科を対象とした企画に適していると判断した。よって、この多職種連携を大切にして、企画テーマを「チームで実践!! 一般病棟における認知症ケア」とした。

本企画を実施するにあたり、3学科の代表者をおく必要があると考え、人間科学部長に調整をお願いし、共同研究者メンバーとして理学療法学科と作業療法学科の教員を選出してもらい、看護学科7名、理学療法学科と作業療法学科各1名の合計9名で本企画を運営することにした。

2. 計画立案

本企画は、2017年9月30日(土曜日)に基調講演とシンポジウム、交流会を合わせたプログラムにすることにした。開催場所は本学とし、時間は13:00から基調講演、14:45からシンポジウム、16:15から交流会(在校生と卒業生のみ参加)とし、17:30終了予定とした。基調講演は、「チー

ムで実践!! 一般病棟における認知症ケア」にてらして、認知症者をその人の視点でケアを行おうとするパーソン・センタード・ケアを急性期病院に取り入れるための研究を行なっている鈴木みずえ先生に依頼することにした。シンポジウムは、座長を本学の教員である奥村宣久先生とし、シンポジストは、認知症ケアにかかわっている理学療法学科、作業療法学科、看護学科卒業生各1名とした。今回、シンポジストを卒業生とすることで、実習施設に学生の成長を知ってもらえる良い機会になるとともに、今後の就職活動にもつながるとも考えた。よって、実習施設を含む恵庭市、千歳市、北広島市、札幌市などの一般病棟を含む施設へも基調講演とシンポジウムの参加を募ることにした。

なお、本企画は「平成29年度北海道文教大学共同研究 多職種連携に貢献できる卒業生育成に関する交流会の効果(研究代表:小堀ゆかり)」の助成を受けて行なった。

3. 準備

1) 運営にかかわる事前準備

2017年4月3日(月曜日)に第1回目の打ち合わせ会を行った。この会議では、研修会の趣旨、テーマ、シンポジストの選出基準、今後の方向性や各担当役割などを確認した。タイムスケジュールは、月単位で実施内容を抽出して担当者を決定した。

基調講演を担当していただく鈴木先生には、テーマは『パーソン・センタードな視点から見た一般病棟における認知症ケア「急性期だから…」を言い訳にしないためのできることさがし』とし、研修会の趣旨と講演内容を説明した上で依頼をして承諾を得た。シンポジストは、各学科の共同研究者が卒業生と調整をして承諾を得た。

2017年7月27日(木曜日)に、シンポジスト小菅勇亮さん(理学療法士 札幌明日佳病院)、田中沙樹さん(作業療法士 北星病院)、中村英里さん(看護師 札幌山の上病院)と座長である奥村先生を交えた打ち合わせ会を行った。テーマは、「一般病棟における認知症者の日常生活を守る!!

相乗効果がねらえるチームとは？」とし、本企画の趣旨を説明したうえで、各シンポジストに担ってもらいたい役割を説明した。

事前の最終打ち合わせは2017年8月29日（月曜日）に各シンポジストの発表順番や発表内容の確認を行った。

交流会は、在校生と卒業生が話をする機会なので、なごみ歓談できるように大学食堂で実施することとし、軽食と飲み物を提供するように調整した。

会場は当初、鶴岡記念講堂を予定していたが、開場時間を12:00としたため早めに入場した参加者が食事をする可能性もあり、急遽、本館大講堂へ変更した。

2) 参加者を集めるための準備

案内状とチラシの発送は、2017年6月中を予定していたが、早すぎて参加者が忘れてしまう危険性があると判断し、勤務表作成に間に合い、しかも企画を忘れられない時期として7月中に修正した。卒業生へは封書を用いてチラシと案内状を発送した。出欠は同封のはがきを返信してもらうことで確認した。在校生へは、チラシを配布して出欠を確認した。一般参加者は北海道厚生局の診療所一覧リストに掲載されていた札幌市、恵庭市、北広島市、石狩市、岩見沢市内にある有床の病院へチラシと案内状を発送し、出欠は同封のファックス用紙を活用してもらった。チラシとポスターは同一の図柄とした。また、高齢者をモチーフにして柔らかい色合いを使用し、なじみやすい内容にした。

3) 運営に関する当日準備

ボランティアは各学科から、学生5～6名選出してもらい合計16名で、設営8名、誘導5名、受付3名と役割分担を行なった。教員は、各企画に担当者を配置した他に、オリエンテーションと受付のサポート、フリーを配置した。ボランティア学生と共同研究者は10:00に集合して、オリエンテーションを実施し、その後各担当に分かれてそれぞれの役割を担った。

Ⅲ. 研修会の実施

2017年9月30日（土曜日）、12:00の会場とともに、多くの参加者が来場した。来場者数は卒業生22名、在校62名、一般参加者127名の合計211名であった。事前オリエンテーションと橘内勇学部長の挨拶の後、研修会が始まった。基調講演では、鈴木先生が資料をもとにパワーポイントを活用して、わかりやすい説明を行ってくださった。シンポジウムは、各シンポジストの話題提供の後、ディスカッションを行った。フロアからの質問は、現実的で具体的な内容が多かった。

交流会は、大学食堂へ場所を移して行った。卒業生12名、在校生41名と教員が参加した。在校生は、卒業後の自分たちが想像できるような質問をなげかけ、談笑しながら会話が弾んでいた。

Ⅳ. 本企画の評価

本企画の評価は、参加者による評価、ボランティア学生と共同研究者の評価によって行った。

1. 参加者によるアンケート結果

アンケートは、研修会の参加者に対して共同研究者が独自で作成した質問紙を活用して行った。質問内容は対象者の基本属性、参加動機、研修の理解度や今後への期待などであった。アンケート用紙は研修会と交流会開始時に配布し、各会終了時に回収箱に提出してもらい回収した。データ分析は、単純集計と内容分析の手法を用いて行なった。

倫理的配慮は、研修会の事前オリエンテーションにおいて、研究協力依頼として研究の趣旨と方法を説明した。さらに質問紙には研究の趣旨と匿名性の保持、プライバシーの保護などの必要項目を記載し、研究協力は自由であること、質問紙の提出を持って同意してもらうことのできた。回収はボックスを用いて行い提出者がわからないようにした。なお、本調査は、筆者が所属している倫理審査委員会で承認を得て行った（No. 29016）。

1) 基調講演とシンポジウム

アンケートは、一般参加者127名中107名（回収率：84.3%）、卒業生参加者22名中19名（回収率：86.4%）、在校生参加者62名中58名（回収率：93.5%）から回収できた。

(1) 参加者の概要（表1）

一般参加者の職種は、看護師が86名（80.4%）、作業療法士が8名（7.5%）、理学療法士が2名（1.9%）などであった。経験年数は、10年以上20年未満が最も多く45名（42.1%）で、次に20年以上が38名（35.5%）と10年以上が多くを占めていた。昨年の院外研修参加回数は、3～5回が34名（31.8%）で最も多く、1～2回が25名（23.4%）、参加していないが26名（24.3%）であった。参加プログラムは、基調講演とシンポジウムの両方に参加したものが82名（76.6%）と大多数を占め、次に基調講演のみ参加したものが24名（22.4%）であった。参加動機は、「テーマに興味があった」が62名（50.4%）と大半を占め、次いで「基調講演に興味があった」28名（22.8%）、「上司に勧められた」が22名（17.9%）であった。

卒業生参加者の職種は、理学療法士が10名（52.6%）と最も多く、次に看護学科が7名（36.8%）、作業療法学科が2名（10.5%）であった。経験年数は、5～10年未満が8名（42.1%）と最も多く、1年未満と1年以上3年未満が各4名（21.1%）であった。昨年の院外研修参加回数は、1～2回が9名（47.4%）と最も多く、次に3～5回が5名（26.3%）であった。参加プログラムは、基調講演とシンポジウムの両方に参加したものが14名（73.7%）で基調講演のみに参加したものは5名（26.3%）であった。参加動機は、「テーマに興味があった」が13名（54.2%）で大半を占めていた。

在校生参加者は、看護学科が37名（63.8%）で、理学療法学科が13名（22.4%）、作業療法学科が8名（13.8%）であった。学年は4年生が36名（62.1%）と最も多く、次に3年生が17名（29.3%）、2年生が5名（8.6%）で、1年生は0名であった。参加プ

ログラムは基調講演とシンポジウムの両方に参加したものが54名（93.1%）で大多数を占めていた。参加動機は、「本学教員に薦められた」が41名（67.2%）、「テーマに興味があった」が9名（14.8%）であった。

(2) 一般参加者の認知症ケアや多職種連携に対する理解度（表2）

一般参加者は、認知症ケアに対して、「よく理解できた」が63名（58.9%）、「どちらかといえば理解できた」が42名（39.3%）、「あまり理解できなかった」が2名（1.9%）で、「まったく理解できなかった」は0名であった。多職種連携は「よく理解できた」が59名（55.1%）、「どちらかといえば理解できた」が39名（36.4%）、「あまり理解できなかった」は6名（5.6%）、まったく理解できなかった」が1名（0.9%）であった。

卒業生参加者は、認知症ケアに対して、「よく理解できた」が12名（63.2%）、「どちらかといえば理解できた」が7名（36.8%）、「あまり理解できなかった」と「まったく理解できなかった」は各0名であった。多職種連携は「よく理解できた」が10名（52.6%）、「どちらかといえば理解できた」が9名（47.4%）、「あまり理解できなかった」、「まったく理解できなかった」は各0名であった。

在校生参加者は、認知症ケアに対して、「よく理解できた」が30名（51.7%）、「どちらかといえば理解できた」が24名（41.4%）、「あまり理解できなかった」が4名（6.9%）で、「まったく理解できなかった」は0名であった。多職種連携は「よく理解できた」が26名（44.8%）、「どちらかといえば理解できた」が29名（50.0%）、「あまり理解できなかった」が2名（3.4%）、まったく理解できなかった」は0名であった。

(3) 研修による意欲への影響（表3）

一般参加者の認知症ケアへの意欲は「とても高まった」が47名（43.9%）「どちらかといえば高まった」が58名（54.2%）、「あまり高まらなかった」と「まったく高まらなかった」は各0名であった。多職種連携への意欲は、「とても高まった」

表1 参加者の概要

職種	n=107		n=19		n=58	
	一般参加者人数	%	卒業生人数	%	在校生人数	%
看護師	86	80.4	7	36.8		
作業療法士	8	7.5	2	10.5		
介護士	5	4.7				
理学療法士	2	1.9	10	52.6		
介護福祉士	2	1.9				
MSW	2	1.9				
大学教員	1	0.9				
無回答	1	0.9				
学科						
看護学科					37	63.8
理学療法学科					13	22.4
作業療法学科					8	13.8
経験年数別参加者						
1年未満	4	3.7	4	21.1		
1年以上3年未満	3	2.8	4	21.1		
3年以上5年未満	4	3.7	2	10.5		
5年以上10年未満	13	12.1	8	42.1		
10年以上20年未満	45	42.1	1	5.3		
20年以上	38	35.5				
学年						
1年生					0	0.0
2年生					5	8.6
3年生					17	29.3
4年生					36	62.1
昨年の院外研修参加回数						
参加していない	26	24.3	3	15.8		
1～2回	25	23.4	9	47.4		
3～5回	34	31.8	5	26.3		
6回以上	19	17.8	2	10.5		
無回答	3	2.8	0	0.0		
本日参加プログラム						
基調講演のみ	24	22.4	5	26.3	3	5.2
シンポジウムのみ	0	0.0	0	0.0	0	0.0
基調講演とシンポジウム	82	76.6	14	73.7	54	93.1
無回答	1	0.9	0	0.0	1	1.7
参加動機（複数回答あり）						
テーマに興味があった	62	50.4	13	54.2	9	14.8
新しいことを学んでみたかった	4	3.3	1	4.2	2	3.3
基調講演に興味があった	28	22.8	2	8.3	1	1.6
シンポジウムに興味があった	4	3.3	1	4.2	1	1.6
上司に勧められた	22	17.9	2	8.3		
先輩や同級生に勧められた					4	6.6
本学教員に勧められた	3	2.4	0	0.0	41	67.2
同窓生と交流をしたかった	0	0.0	3	12.5	0	0.0
母校に来たかった			1	4.2		
同級生に誘われた			1	4.2		
スタッフとして					3	5.2

表2 研修内容の理解度

認知症ケアに対する理解度	n=107		n=19		n=58	
	一般参加者人数	%	卒業生人数	%	在校生人数	%
よく理解できた	63	58.9	12	63.2	30	51.7
どちらかといえば理解できた	42	39.3	7	36.8	24	41.4
あまり理解できなかった	2	1.9	0	0.0	4	6.9
まったく理解できなかった	0	0.0	0	0.0	0	0.0
多職種連携に対する理解度						
よく理解できた	59	55.1	10	52.6	26	44.8
どちらかといえば理解できた	39	36.4	9	47.4	29	50.0
あまり理解できなかった	6	5.6	0	0.0	2	3.4
まったく理解できなかった	1	0.9	0	0.0	0	0.0
無回答	2	1.9	0	0.0	1	1.7

が44名 (41.1%), 「どちらかといえば高まった」が54名 (50.5%), 「あまり高まらなかった」が5名 (4.7%) と「まったく高まらなかった」は1名 (0.9%) であった。

卒業生参加者の認知症ケアへの意欲は「とても高まった」が10名 (52.6%), 「どちらかといえば高まった」が9名 (47.4%), 「あまり高まらなかった」と「まったく高まらなかった」は各0名であった。多職種連携への意欲は「とても高まった」が7名 (36.8%), 「どちらかといえば高まった」が12名 (63.2%), 「あまり高まらなかった」と「まったく高まらなかった」は各0名であった。

在校生参加者の認知症ケアへの意欲は「とても高まった」が29名 (50.0%), 「どちらかといえば高まった」が27名 (46.6%), 「あまり高まらなかった」が2名 (3.4%), 「まったく高まらなかった」は0名であった。多職種連携への意欲は「とても高まった」が17名 (29.3%), 「どちらかといえば高まった」が38名 (65.5%), 「あまり高まら

なかった」が3名 (5.2%), 「まったく高まらなかった」は0名であった。

(4) 研修による認知症ケアと多職種連携の方法理解 (表4)

一般参加者の認知症ケアの方法理解は、「よく理解できた」が48名 (44.9%), 「どちらかといえば理解できた」が55名 (51.4%), 「あまり理解できなかった」が2名 (1.9%) で、「まったく理解できなかった」は0名であった。「多職種連携の方法」は「よく理解できた」が32名 (29.9%), 「どちらかといえば理解できた」が58名 (54.2%), 「あまり理解できなかった」は12名 (11.2%), 「まったく理解できなかった」が1名 (0.9%) であった。

卒業生参加者は、認知症ケアの方法理解に対して、「よく理解できた」が11名 (57.9%), 「どちらかといえば理解できた」が8名 (42.1%), 「あまり理解できなかった」と「まったく理解できなかった」は0名であった。多職種連携の方法理解は「よく理解できた」が7名 (36.8%), 「どちら

表3 研修による意欲

認知症ケアへの意欲	n=107		n=19		n=58	
	一般参加者人数	%	卒業生人数	%	在校生人数	%
とても高まった	47	43.9	10	52.6	29	50.0
どちらかといえば高まった	58	54.2	9	47.4	27	46.6
あまり高まらなかった	0	0.0	0	0.0	2	3.4
まったく高まらなかった	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	2	1.9	0	0.0	0	0.0
多職種連携への意欲						
とても高まった	44	41.1	7	36.8	17	29.3
どちらかといえば高まった	54	50.5	12	63.2	38	65.5
あまり高まらなかった	5	4.7	0	0.0	3	5.2
まったく高まらなかった	1	0.9	0	0.0	0	0.0
無回答	3	2.8	0	0.0	0	0.0

表4 研修による方法の理解

認知症ケアの方法理解	n=107		n=19		n=58	
	一般参加者人数	%	卒業生人数	%	在校生人数	%
よく理解できた	48	44.9	11	57.9	21	36.2
どちらかといえば理解できた	55	51.4	8	42.1	35	60.3
あまり理解できなかった	2	1.9	0	0.0	2	3.4
まったく理解できなかった	0	0.0	0	0.0	0	0.0
無回答	2	1.9	0	0.0	0	0.0
多職種連携の方法理解						
よく理解できた	32	29.9	7	36.8	17	29.3
どちらかといえば理解できた	58	54.2	11	57.9	38	65.5
あまり理解できなかった	12	11.2	1	5.3	3	5.2
まったく理解できなかった	1	0.9	0	0.0	0	0.0
無回答	4	3.7	0	0.0	0	0.0

かといえ理解できた」が11名 (57.9%), 「あまり理解できなかった」が1名 (5.3%), 「まったく理解できなかった」は0名であった。

在校生参加者の認知症ケアの方法理解は, 「よく理解できた」が21名 (36.2%), 「どちらかといえ理解できた」が35名 (60.3%), 「あまり理解できなかった」が2名 (3.4%) で, 「まったく理解できなかった」は0名であった。多職種連携の方法理解は「よく理解できた」が17名 (29.3%), 「どちらかといえ理解できた」が38名 (65.5%), 「あまり理解できなかった」が3名 (5.2%), まったく理解できなかった」は0名であった。

(5) 今後の研修参加 (表5)

一般参加者が回答した在校生と卒業生の交流機会について「とても必要だと思う」が29名 (27.1%), 「どちらかといえ必要だと思う」が43名 (40.2%), 「あまり必要だと思わない」が22名 (20.6%), 「まったく必要だと思わない」は3名 (2.8%) であった。今後参加したい研修企画は「最新の専門知識」が47名 (34.1%), 「専門技術の向上」が23名 (16.7%), 「実践的な知識・技術」が60名 (43.5%), 「その他」が4名 (2.9%) であった。

「その他」では, 「病院以外で働いている人の講演」, 「臨床現場での生の事例」, 「高齢者への取り組みについて」, 「認知症について」であった。

卒業生参加者が回答した在校生と卒業生の交流機会について「とても必要だと思う」が3名 (15.8%), 「どちらかといえ必要だと思う」が12名 (63.2%), 「あまり必要だと思わない」が4名 (21.1%), 「まったく必要だと思わない」は0名であった。今後加したい研修企画は「最新の専門知識」と「専門技術の向上」が各7名 (25.9%), 「実践的な知識・技術」が10名 (37.0%), 「その他」が2名 (7.4%) であった。「その他」は, 「多職種合同」, 「手術看護に関するもの」であった。

在校生参加者が回答した在校生と卒業生の交流機会について「とても必要だと思う」が26名 (44.8%), 「どちらかといえ必要だと思う」が27名 (46.6%), 「あまり必要だと思わない」が5名 (8.6%), 「まったく必要だと思わない」は0名であった。今後参加したい研修企画は「最新の専門知識」が9名 (14.8%), 「専門技術の向上」が15名 (24.6%), 「実践的な知識・技術」が36名 (59.0%) であった。

表5 今後の研修参加	n=107		n=19		n=58	
在校生と卒業生の交流機会	一般参加者人数	%	卒業生人数	%	在校生人数	%
とても必要だと思う	29	27.1	3	15.8	26	44.8
どちらかといえ必要だと思う	43	40.2	12	63.2	27	46.6
あまり必要だと思わない	22	20.6	4	21.1	5	8.6
まったく必要だと思わない	3	2.8	0	0.0	0	0.0
無回答	10	9.3	0	0.0	0	0.0
参加したい研修企画 (複数回答)						
最新の専門知識	47	34.1	7	25.9	9	14.8
専門技術の向上	23	16.7	7	25.9	15	24.6
実践的な知識・技術	60	43.5	10	37.0	36	59.0
その他	4	2.9	2	7.4	0	0.0
多職種合同	0		1			
病院以外で働いている人の講演	1					
臨床現場での生の事例	1					
高齢者への取り組みについて	1					
認知症について	1					
手術看護に関するもの	0		1			
無回答	4	2.9	1	3.7	1	1.6

(6) 開催希望に対する自由記述 (表6. 7. 8)

自由記述は、1文章1文節に切片化して、意味内容の類似性に合わせてカテゴリー化した。以下にカテゴリーを【 】で、コードを[(コード数)]で示す。

一般参加者の自由記述は18件で、切片化数は36件であった。抽出されたカテゴリーは【会場環境】【希望する研修】【研修での気づき】【充実した研修】【物足りない研修】の6つであった。

【会場環境】は、[会場がきれい (1)][会場が寒かった (2)][車で来られた (1)][子ども連れでも参加できる配慮 (2)][スタッフの出入りが激しかった (1)]によって抽出された(表6)。

【希望する研修】は、[健康管理 (1)][今後も研修があるとよい (1)][新人のメンタル面の研修 (1)][生活習慣病 (1)][セルフケア (1)][卒業生と在校生の交流をみたかった (1)][日常生活

でのリハビリ (1)][臨床で実践できる内容 (1)]によって抽出された。【研修での気づき】は、[具体的な問題点の明確化 (1)][現場での悩みがある (1)][身体拘束解除に取り組みたい (1)][認知症患者をあきらめない (1)]によって抽出された。【充実した研修】は、[感謝 (4)][基調講演が聴けてよかった (1)][基調講演が分かりやすかった (1)][基調講演は現場で行ないたい内容 (1)][シンポジストの成長に驚いた (1)]によって抽出された。【物足りない研修】は、[急性期病院の話を聴きたかった (1)][認知症の基本的な内容 (3)]によって抽出された。

卒業生の自由記述は3件で、切片化数は3件であった。抽出されたカテゴリーは【希望する研修】【会場環境】の2つであった(表7)。

【希望する研修】は、[研修会の定期開催 (2)]によって抽出された。【会場環境】は、[ウエルカ

表6 一般参加者の自由記述

カテゴリー	コード	コード数
会場環境	会場がきれい	1
	会場が寒かった	2
	車で来られた	1
	子ども連れでも参加できる配慮	2
	スタッフの出入りが激しかった	1
希望する研修	健康管理	1
	今後も研修があるとよい	1
	新人のメンタル面の研修	1
	生活習慣病	1
	セルフケア	1
	卒業生と在校生の交流をみたかった	1
	日常生活でのリハビリ	1
	臨床で実践できる内容	1
研修での気づき	具体的な問題点の明確化	1
	現場での悩みがある	1
	身体拘束解除に取り組みたい	1
	認知症患者をあきらめない	1
充実した研修	感謝	4
	基調講演が聴けて良かった	1
	基調講演が分かりやすかった	1
	基調講演は現場で行いたい内容	1
	シンポジストの成長に驚いた	1
物足りない研修	急性期病院の話を聴きたかった	1
	認知症の基本的な内容	3

表7 卒業生の自由記述

カテゴリー	コード	コード数
希望する研修	研修会の定期開催	2
会場環境	ウエルカムドリンクが良い	1

ムドリンクが良い (1)] によって抽出された。

在校生の自由記述は3件で、切片化数は3件であった。抽出されたカテゴリーは【希望する研修】【充実した研修】の2つであった (表8)。

【希望する研修】は、[認知症の慢性期 (1)] [家族に対するケア (1)] によって抽出された。【充実した研修】は、[シンポジストの話がためになった (1)] によって抽出された。

2) 交流会 (表9)

アンケートは、卒業生12名中10名 (回収率: 83.3%)、在校生参加者41名中29名 (回収率: 70.7%) から回収できた。

(1) 参加者の概要

卒業生参加者が在籍していた学科は、看護学科が7名 (70.0%) と最も多く、次に作業療法学科2名 (20.0%) であった。経験年数は、4年が3名 (30.0%) で、2年、3年、6年が各1名 (10.0%) であった。在校生参加者の所属学科は、看護学科が14名 (48.3%) で、理学療法学科が10名 (34.5%)、作業療法学科が5名 (17.2%) であった。学年は、4年生が14名 (48.3%) と最も多く、次に3年生10名 (34.5%)、2年生が5名 (17.2%) であった。

(2) 満足度

卒業生参加者の交流会満足度は、「大変満足した」が6名 (60.0%) で「どちらかといえば満足した」が4名 (40.0%) であった。満足した理由は、「卒業生もしくは在校生と交流できた」が9名 (52.9%) と最も多く、「情報交換できた」が4名 (23.5%)、「自分の課題を発見できた」が2名 (11.8%)、「リフレッシュできた」が1名 (5.9%) であった。在校生参加者の交流会満足度は、「大変満足した」が17名 (58.6%) で「どちらかといえば満足した」が12名 (41.4%) であった。満足した理由は、「卒業生もしくは在校生と交流できた」が22名 (52.4%)

と最も多く、「情報交換できた」が12名 (28.6%)、「リフレッシュできた」が5名 (11.9%) であった。

(3) 今後の参加

卒業生参加者の今後の交流会への参加は、「ぜひ参加したい」が4名 (40.0%)、「内容によっては参加したい」が6名 (60.0%) であった。今後参加したいプログラムは、「同年代との交流をメインとしたプログラム」が4名 (23.5%)、「幅広くいろいろな年代と交流できるプログラム」が7名 (41.2%)、「在校生との交流をメインとしたプログラム」と「他学科の卒業生と交流できるプログラム」が各3名 (17.6%) であった。

在校生参加者の今後の交流会への参加は、「ぜひ参加したい」が9名 (31.0%)、「内容によっては参加したい」が17名 (58.6%) であった。今後参加したいプログラムは、「同年代との交流をメインとしたプログラム」は5名 (13.9%)、「幅広くいろいろな年代と交流できるプログラム」が17名 (47.2%)、「在校生との交流をメインとしたプログラム」が4名 (11.1%)、「他学科の卒業生と交流できるプログラム」が8名 (22.2%) であった。

自由記述は、卒業生参加者による記載が2件で、内容は、「立食形式の方が話しやすそう」と「勉強会たくさんやってください」で、在校生は記載がなかった。

2. 実施者による評価

2017年9月30日 (土曜日) にボランティア学生から意見聴取した。得られた意見は、企画進行に対するものはなかった。会場変更に伴い、誘導係りを配置したが、タクシーで来場された参加者が鶴岡記念講堂に向かってしまったということで、急遽、鶴岡記念講堂入り口に貼紙をした経緯があった。もっと全体に周知されると良かったとの

表8 在校生参加者の自由記述

カテゴリー	コード	コード数
希望する研修	認知症の慢性期	1
	家族に対するケア	1
充実した研修	シンポジストの話がためになった	1

意見があった。

2017年10月25日(水曜日)の最終打ち合わせは、共同研究者全員が参加して反省会を行なった。ここでも企画全体に対する意見はなかったが、進行に対して、「フリーがもう一人いたほうが良かった」こと、「卒業生の参加が少なかったの、どのように参加を促すのが良いのか」などの意見が聴かれた。

3. 全体総括

1) 参加者

今回の全体参加者が211名であったこと、また、一般参加者と卒業生の参加者の約50%以上が「テーマに興味があった」と回答していたことから、テーマ設定を含む企画は適切であったと判断する。しかし、卒業生の参加が22名ときわめて少ない結果となった。卒業生参加者の表7の【希望する研修】に含まれていた「研修会の定期開催(2)」が抽出されていたこと、また、表5の今後参加したい研修企画が「実践的な知識・技術」10名(37.0%)と多かったことを参考にして、今後、

表9 交流会のアンケート結果

在籍学科	n=10		n=29	
	卒業生人数	%	在校生人数	%
理学療法学科	0	0.0	10	34.5
作業療法学科	2	20.0	5	17.2
看護学科	7	70.0	14	48.3
無回答	1	10.0	0	
学年及び卒後				
1年	0	0.0	0	0.0
2年	1	10.0	5	17.2
3年	1	10.0	10	34.5
4年	3	30.0	14	48.3
6年	1	10.0		
無回答	4	40.0		
交流会の満足度				
大変満足した	6	60.0	17	58.6
どちらかと言えば満足した	4	40.0	12	41.4
あまり満足できなかった	0	0.0	0	0.0
全く満足できなかった	0	0.0	0	0.0
満足した理由(複数回答)				
卒業生もしくは在校生と交流できた	9	52.9	22	52.4
情報交換できた	4	23.5	12	28.6
母校のつながりを感じられた	0	0.0	1	2.4
他学科の卒業生もしくは在校生と交流できた	0	0.0	2	4.8
自分の課題を発見できた	2	11.8	0	0.0
自分の課題の解決の糸口が見えた	0	0.0	0	0.0
リフレッシュできた	1	5.9	5	11.9
その他	0	0.0	0	0.0
無回答	1	5.9	0	0.0
今後の参加				
ぜひ参加したい	4	40.0	9	31.0
内容によっては参加したい	6	60.0	17	58.6
あまり参加したくない	0	0.0	0	0.0
参加しない	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	3	10.3
今後参加したい理由(複数回答)				
同年代との交流をメインとしたプログラム	4	23.5	5	13.9
幅広くいろいろな年代と交流できるプログラム	7	41.2	17	47.2
在校生との交流をメインとしたプログラム	3	17.6	4	11.1
他学科の卒業生と交流できるプログラム	3	17.6	8	22.2
その他	0	0.0	0	0.0
無回答	0	0.0	2	5.6
自由記述	立食形式の方が話しやすそう 勉強会たくさんやってください			

卒業生を対象とした実践的な研修会を定期的開催し、会の実施を定着させていくことが重要であると考え。また、教員だけが企画するのではなく、卒業生が中心となり会を運営することで親近感を持ち、横のつながりが存分に活かされるようにすることも方法の一つであると判断する。さらに、今回のテーマは時代要請に合致した旬なテーマであったにもかかわらず、卒業生参加者が少なかったことは、時代要請に疎いことも考えられるため、基礎教育の中で基本的な知識だけではなく、時代の流れとともに変化する国民のニーズや政策などに影響を受けるそれぞれの専門職が置かれている立場についても敏感になることを強調した教育を行なっていく必要もある。

表1から在校生参加者は、3年生と4年生が90%以上を占めていたことから、研修会に出席することの重要性に気づけていたことが推測できる。しかし学習する姿勢は1年生から備わっている必要があるため、研修会を含む学習する機会を活かしていけるように低学年から指導する必要がある。

一般参加者の経験年数では、80%以上が10年以上であった。また、卒業生の参加者も5年以上が約50%以上を占めていたことから、本テーマに対して危機感を持っているのは、中堅以上であることが推測できる。しかし、本テーマは認知症者と直接、接する機会が多いスタッフが一番困るテーマであると考え、自分達の困りごとに敏感になり、解決すべき能力を養うような教育が必要であると考え。

2) 企画の満足度

総合的にアンケート結果を確認すると、満足度の高い企画であったと考える。また、本企画により意欲が高まり、認知症ケアと多職種連携の方法も理解できたと考えるため、実践に活かせる内容であったと判断する。特に表5で明らかにされていたように「実践的な知識・技術」に関連する研修企画への要望が高かった。理学・作業・看護学において、理論的に学問を学ぶのであれば、卒後教育として大学院教育が充実してきている。よっ

て、我々が卒業生に対して貢献できる企画は、具体的な内容であることが望まれる。今回の企画も、参加者の要望にかなった内容であったと考えるため、今後もこの方向で実施していく必要がある。

3) 運営

計画立案から大きな内容変更なく実施できた。これは、具体的な役割分担とタイムスケジュールの明確化、そして具体的なオリエンテーションが実施されたためであったと考える。

4) 今後の課題

先に述べたが、企画される研修に対して特に「実践的な知識・技術」に対する要望が強かった。これは、現場での困りごとを解決するために必要な内容であると考え。この要望が叶うような計画を立案するように心がける。また、卒業生の参加数を増やすためにも、学科や学部、大学単位で実施することと、企画運営に卒業生を巻き込んだ組織づくりを検討する必要があると考える。

V. おわりに

本企画は、多くの方のサポートを受けながら成功を収めた。しかし、これを継続するにはかなりの努力と忍耐を要するものとする。よって今後は学科や学部、大学全体の企画として継続できるように、また、卒業生が積極的にかかわれるような組織づくりが望ましいと考える。

謝 辞

本企画に賛同しご協力をいただきました、鈴木みずえ先生、シンポジストの皆様、演者の所属施設長に深く感謝いたします。

運営にあたり、浅見局長をはじめとする会計課、管財課、学生課の皆様には大変お世話になりました。また、休日にもかかわらずボランティアとしてお手伝いしてくださった初見先生と是元先生ならびに学生の皆様、企画者以外で参加してくださいました教員の皆様、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、本研修と交流会に参加く

ださった全ての皆様に感謝致します。

文 献

- 1) 日本看護協会 (2017. 12. 31). 継続教育の基準 <https://www.nurse.or.jp/nursing/education/keizoku/pdf/keizoku-ver2.pdf>
- 2) 厚生労働省 (2017. 12. 31). 新人看護職員研修ガイドライン【改訂版】 http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-10800000-Iseikyoku/0000049466_1.pdf
- 3) 文部科学省 (2017. 12. 31). キャリアガイダンスの法令上の明確化について http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/027/siryo/attach/1287158.htm
- 4) 永谷智恵, 高岡哲子, 辻慶子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり: 入職後6 ヶ月以降の新人看護師が認識した成長に必要な条件, 第33回日本看護科学学会学術集会, 日本看護科学学会学術集会講演集: 421, 2013.
- 5) 高岡哲子, 永谷智恵, 辻恵子, 榊原千佐子, 小堀ゆかり: 入職後6 ヶ月目以降の新人看護師が認識した自らの成長を妨げている要因, 第33回日本看護科学学会学術集会, 日本看護科学学会学術集会講演集: 420, 2013.
- 6) 矢野芳美, 高岡哲子, 笹木葉子, 中村恵子, 辻慶子, 永谷智恵, 榊原千佐子, 小堀ゆかり: 入職1年の看護師が認識している成長に必要な条件, 第34回日本看護科学学会学術集会, 日本看護科学学会学術集会講演集: 594, 2014.
- 7) 厚生労働省 (2017. 12. 31). 平成29年版高齢社会白書 http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf
- 8) 亀井智子: 一般病棟の等の“認知症者へのチームケア”が本格的に始まった! 認知症ケア加算の概要, Expert Nurse, 32 (8): 10-13, 2016.